タウン情報⑦

「関東大震災（流言飛語）」

大正12年9月1日、この日は朝から蒸し暑い日でした。

突如、大きな爆風と共に地面へ叩きつけられました。起き上がろうと無我夢中で側の杉木にしがみつき、静まるのを待ちました。家の中の物は何もかも滅茶苦茶に散乱し、棚の品は全部落ちていました。余震は猶も続き、大事な品は身に着けて竹林へ避難しました。夜が更けると共に東京の空は真っ赤に火の手が上がり昼の様でした。翌二日からは、朝鮮人の襲撃騒動が始まり、女性・子供は牟礼の雑木林に避難させ、男性は日本刀や竹刀で武装して、玉川上水の各橋を警備して検問所を設置したりしました。流言が何処からともなく言い伝えられて大騒ぎになりました。幸い、久我山・宮前には火災や倒壊家屋も不幸中の幸いでした。ただ、流言飛語の恐ろしさには驚きました。

☆災害時には正しい情報を伝えるようにしましょう！

秦　暢三著「久我山を回想して」

タウン情報⑧

神田上水（神田川）

三代将軍・家光の頃には人口増加の為、井の頭の水を引用して江戸市民に利用される様になりました。昭和30年頃まで、神田川に沿って田んぼがあり、稲作をしていました。田に水を引き入れる為にせきが造られ、現在はみんな無くなりました。

私が中学校に通学している頃は、大雨が降ると川は溢れ、久我山から富士見ヶ丘一帯が水浸しとなり、井の頭池から大きな鯉が流れてきて飛び回っていました。下水化が進み、川は汚染され、死に川になっていきました。それから町内の下水化が進み、汚水が川に流れ込まなくなり、川底を深く整備して今に至っています。

タウン情報⑨

玉川上水

玉川上水は徳川幕府四代将軍・家綱の時、江戸市中に引水の為、多摩川に詳しい羽村の名主・庄衛門、清右衛門兄弟に玉川上水道工事を任命された。玉川兄弟は、承応2年4月から工事に着手して、羽村から四ツ谷大木戸まで約十三里の上水道工事を1年余りの歳月で完成しました。途中、難所も多く、出資も多く私財を費って遂行なしたる功績に依り、名字帯刀が許されて、玉川の性を名乗るようになりました。その頃は、測量器具もなく、ろうそく・線香の灯を頼りに高低を測り苦労に苦労を重ねて完成させました。今は使命を全うし、細々と流れています。